

～平成家族物語～舞台芸術によるまちづくりプロジェクト第1弾

『東松山戯曲賞』選評

選定委員：桑原裕子氏

「灰の降る夜に」

父子のやりとりが微笑ましく、最後に亡くなった妻のテープが夫の背中を押してくれるささやかな奇跡も良かったと思います。ただ、シーンの大半が電話とテープで構成されているのは気になりました。もう一步工夫して、関わる人々がその場に集まってくるような状況を作れたらもっと特別な一夜の話になったのでは。

「埴生の宿」

謎を孕んだストーリー展開や、生の境界が曖昧になっていく後半の展開に興味を引かれ、美しい絵が想像できるシーンもありました。それだけに、暗転が多いのが勿体ないです。細かくシーンを分けるなら明転後にもっと変化があった方が良いと感じました。また、会話の中で専門用語や含蓄のあるたとえ話が頻出するのは(画家という役ゆえかも知れませんが)、人物が知識をひけらかしているように見えてしまい、もっと抑えた方が効果的だったように思います。

「旋律は遠く、遠くに……。」

「オカマ」である父を受け入れられない思春期の娘の心情は理解できるのですが、LGBT やトランスジェンダーなど現代的な解説があるにもかかわらず、「オカマ」という呼び方ばかり、その存在に対する概念が古典的で、これは昭和の物語なのでは？と何度も錯覚してしまいました。時代錯誤に陥る原因として、いかにも悪役然とした地上げ屋の存在や、ケータイが普及している時代にもかかわらず用事がある人がいちいち店を訪れる不自然さ(=都合の良さ)等もあるかと思います。

遅く優しい徹子は好きでした。

「空で千の鈴が鳴る」

随所に盛り込まれるギャグが私には少し苦しく、無理にボケてるんじゃないか？と感じてしまう箇所がいくつかあり、律儀にツッコむ真珠も含め、全員が幼く感じてしまいました。関係性の距離がどの人物も等しく近い印象なのも幼さに繋がっているのかもしれませんが。突如宇宙人が登場する流れには驚きましたが、連れていかれた子どもたちの存在が、「空の星を見るとなぜだか泣きたくなる」という現象の理由だったのかと思わせる終わり方は切なくてグッときました。

「枇杷の家」

アラ還女性3人のシェアハウスは姦しく話題に事欠かず、この家に住んでみたいと思いました。どの会話もユーモラスに生き生きと描かれていています。「私たちに未来はあるのかしら？」という最後の問いかけが悲観的なものではなく、逞しさや明るさに満ちたものであるのも個人的に励まされるような想いがしました。それでも、最初に登場したきり出てこない人がいたり、演劇にすると勿体ない人材の配置などもあることから、時々読み方を迷ってしまった感じはあります。大きな事件やテーマじゃなくていいので、この作品を見続けていくとどこへ辿り着くのかという、緩やかな道筋のようなものがあるのもいいなという気はしました。

「離陸」

「息子と連絡がつかない」というごく平凡な起点から複数の物語へ移行して行く展開には派手さがないものの引き込まれ、「本当のケイスケはどこにいる？」ということが小さなサスペンスになっているため、最後まで飽きずに読み進むことができました。

出てくるのはどこにでもいそうな夫婦やカップルばかり。でもだからこそ妻が新天地に旅立つ決意や、関係が一步深まる瞬間がドラマチック。この設定や、夫婦の会話に象徴されるカミのなさに、作家のオフビートな魅力を感じました。

「ひまわりは遠く」

血を分けた家族の絆と、心や記憶で繋がる他人同士の絆。それぞれをどちらの側面からも深く突き詰めようとする姿勢に感銘を受けました。力作だと思います。

それぞれの世代、立場から発する会話も面白く、特に孫の嫁・摩耶の現代的なドライさから発する台詞は登場の度にハラハラさせられ、会話にスリリングな瞬間を生み出していて面白かったです。

終盤、それまで控えめに存在し続けた敏明が葵に対し「いい加減、娘は卒業せんか」「血でなんや？」と投げかけるシーンには胸を揺さぶられました。

私は、丹念に物語を積み上げた「ひまわりは遠く」と、独自の味わいを醸す「離陸」を最初に推しましたが、岩松了氏が「見事なくっちゃべり芝居」と評した「枇杷の家」におけるディティールの細やかな会話劇の面白さも捨てがたく、上演のさい、あのアラ還3人娘に逢ってみたいという想いも高まって、「枇杷の家」の受賞に賛成しました。おめでとうございます。